

例会 作品 帳

◎平成二十六年七月二十六日(第二十回)

(佐藤 亮照)

カワニナの増えし古池今年こそ期待ふくらむ初夏の螢火
オカリナの音色とともにゆるむ顔届けるわれら感謝新たに
淡々と過ぎせし日々は十余年千三百年の寺暦に刻む

(佐藤 志亮)

雨の音ゆうげの匂い今日の空記憶のしおりあの日をひらく

(黒沼 貞志)

農道に自転車漕ぎし老女居り彼岸の母の姿憶えり
ゲリラ雨季を達えて窓叩き若葉の季節の風情乱され
郭公に浅き眠りを破られて衰え氣付く老いの若夏
散り桜片方に置かれし自転車に訪ねし人の氣配を覚ゆ
境内の春の陽溜まり心地よし時を惜しまず独り身を置く

古刹の紅葉を詠みし三景

若葉萌え古刹のもみじいきいきと光蓄え秋に備えん

朝光に古刹のもみじ透かし見ゆ超えし時空は三百有余(既掲載)

雪纏い墨絵のごとき裸木に重ねて憶えりもみじ葉の季(既掲載)

吾子を抱き城址の桜背に臨む視線の先に夢をさがして

一本の桜に集う人々の想いそれぞれ城址の春日

黙々と地面を均す人ありてのゲートボールの戦いまじか

薰風に花散り流るる里山は春行くままに緑深まる

春くれぬ桜散りても集い来て田舎芝居を待つ間流るる

桜木の石をも割りし力見て想い及ぶは我の来し方

里山でおもおもいの春を撮る桜に向かい想い出づくり

里の田に早苗と水とひかり満ち水面に映える山笑う季

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍樂む会)

むせ返る暑景が薰る山恋しこころ急かれて準備に勤しむ
夢求めビルの谷間を縫うようにゆりかもめに乗りビッグサイトへ

フィットネス終えて入りし温泉で閉じた眼に夕陽煌めく

夏つばき花卉に乗せた一滴梅雨の晴れ間の光に輝く

打水を久方ぶりに思い出し洗車のついでに梅雨の晴れ間に

おさな木の一つづつ花咲く山の路片方で優しくハイカー迎えん

蒲公英と再び出会う山の路綿毛も優しく山笑う頃

山路の片方に咲きし谷空木深緑後ろに色合い優し

人知れず可憐に咲きしひめ小百合木漏れ陽受けて初夏を彩る

里山の初夏を先取るひめ小百合棚田に添えし一服の色

高齢と言えども今はタブレット連合い待たせてデータに残す

さり気なくペンション村の店先に若やぐ夏の主の計らい

蝉も鳴き蓮華一つづが色を添え人を迎える湖畔の若夏

恥じらいの色を醸して紫陽花は幽けし想いを言はで思ふぞ

残雪を片方に息づく若芽あり人を迎える山路優し

蝸牛纏わりつきし向日葵が頭を垂れて起きし初秋

(千葉 克明)

いつ来ても賑わいの中浅草寺外国人も知り合いのよう

神楽坂上り下りの通い路古き時代の名残り佇む

あたらしき歌舞伎座もうではじめての玉三郎の女形絶品おやま

奥只見遊覧船浮く人造湖人智の嘗み励ましになり

(寺崎 秀也)

慈悲深き十三仏の軸を掛け想い忍びし進善供養